

白馬だより

鈴木 均（泉州労山・大町労山）

例年より1ヶ月雪解けが早いと言われ、それに伴って高山植物も一月早く開花し（7月末の燕岳ではコマクサが一部枯れ始めていた）、8月下旬になって、ナナカマドの実赤くなり始めている。白馬大雪渓は早くから秋道ルート、針ノ木雪渓も上部の一部だけが残り、剣沢の雪渓も崩壊が激しいという。下廊下の開通が早いとの話もある。唐松岳途中にある扇の雪渓は、学校登山の昼食休憩場所になるが、先日唐松から祖母谷に行ったときに見た雪渓は、例年の四分の一程度で表面は黒く、とても中学生らが弁当を広げる気にはならない無惨な光景になっていた。

いつもの夏より、なぜか蟬の鳴き声が少なく、蜂やアブが多いと村の人の声。この夏は、白馬村も例年以上に暑いように思える。幸い熊の被害は全体的に少ないが、猿とニホンシカが北アルプスに押し寄せてきている。昨年、猿に啜えられたライチョウの写真が衝撃的だったが、今夏「ライチョウサポーター」（県のボランティア）に対し、大天荘に泊まって東天井岳周辺の猿の追い払い作業や火打山に調査に入るサポーターの要請があったが、なかなか日程が難しく応えられなかった。

そんな今年の夏も終わりに近づいているが、私にとっては悲しい夏でもあった。大先輩のYさんが、西穂から奥穂へガイドしている途中で滑落し、亡くなられた。Yさんは労山長野県連の創設間もない頃、副理事長もされていたと後から知った。高校時代から北アルプスをカモシカの如く走り回っていたYさんは、温和ではあるが優しい言葉で話す中身は厳しかった。冬の富士山や八ヶ岳の氷壁などで、アイスクライミングから岩・雪の手ほどきを何度も受けた。

Yさんを知る人は「Yさんが滑落？」と誰しもが言う。実際、登攀中ではあるが岩によるアクシデントではなく、詳しいことはわからないが、晩年心臓の病気を持っていて、一種の「山の突然死」のようだったという。50mも滑落しながら、自ら這い上がり携帯電話してヘリを呼んだが、天気が悪くヘリは飛ばず。一夜ビバークして翌朝救助されたが、だめだったらしい。壮絶な死といえようか。

「山にベテランはいない」と、私は常々思っている。少なくとも自分は常に初心者という気持ちで山に接している。だれでも奢りはないだろうが、自然に勝てるはずはないし、心の隙間があってはならない。

西穂は、現役時代の後輩女性が冬に滑落し、ピッケルを太ももに刺さってしまったが、そのまま一晩ビバーク。翌日救助された。（その女性は、2年前冬の北岳で滑落し、亡くなった）西穂高岳は、私個人にとっては、二人の山仲間を失った因縁の場所でもある。西穂・奥穂・前穂そして北穂から続く槍の峰々は、まさにアルピニズムの世界である。何度登っても心に残る山々だ。

先日、Yさんが亡くなった場所までは行けなかったが、数年ぶりに西穂高岳に登った。奥穂までの縦走も3回ほど行ったので、年齢的にはもう行くことがないだろうと思っはいるが、続く岩稜を見るともう少し行ってみたいと思ったりもする。

8月は、燕から常念、唐松から祖母谷、新穂高から西穂往復日帰り、おなじく新穂高～双六～西鎌～槍～槍平～新穂高でフィニッシュかもしれない。軽く入笠山の予定もあるが、天気次第だ。

この秋は、どこの山に登ろうか。

